

一朝の礼拝から 1

「キリスト山に登る」

列王記上 20 章 22～23 節

日本では初日の出を拝みに山に登ることがあります。小さい頃は山での遭難のニュースを見て、なぜきつい思いをして危険な登山をするのか不思議でした。長じて日本史の研究者となり、日本の修験道では、断崖絶壁を登り、種々宗教体験をする事を知りました。天台宗には回峰行がある事も知りました。またラジオで著名な登山家が、吹雪の山中をひたすら歩いていると、故郷の実家の幻が本当に目の前に現れると話していました。聖書には山に登る話がよく出て来ます。イスラエル人は最初、山地にいたので、その神は、平地のカナン人からは「山の神」と呼ばれました。前宗教主任の二瓶先生が話された、夜のシナイ山に登った時の様子―暗くて険しい山道を登り、夜が明けた時の神々しい山の風景―も聴きました。キリストもよく山に入って祈っています。

日本で有名な吉野山は、桜の名所で、修験の山でもあり、672年の壬申の乱では、ここに隠棲していた大海人皇子（後の天武天皇）が、東国に脱出して挙兵しています。後世、後醍醐天皇もここに逃げ込み、南朝は50年以上も室町幕府に抵抗しました。

著名な史跡なので9年前に私も行ってみました。吉野山でバスに乗ると雪が強くなり、山頂に着くと吹雪となって、樹木の黒い枝は白く覆われ、お堂の手水が凍っていました。下りのバスが来るまで周りを見ていると、雪が止んで少し明るくなり、下の人里が見えました。百人一首に「朝ぼらけ 有明の月とみるまでに 吉野の里に降れる白雪」という歌があります。天から下界を見下ろすような感覚がしました。宇宙飛行士が、宇宙から地球を見て帰ると、宗教的人間になるという話があります。キリストが山から見下ろした時、同じ気持ちがあったのだろうかとも想像しました。吉野山に登って、少しキリストに近づいたような気がします。

細井 浩志(日本文化学科)